

魚売りの伝承・続報

— 隠岐＝島後の事例 —

胡桃沢 勘 司



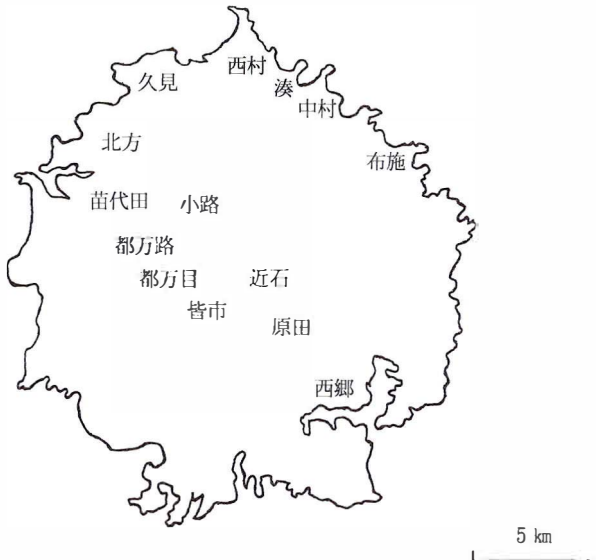
隠岐＝島後（西郷）

はじめに

本稿は、隠岐Ⅱ島後の魚売りの伝承について報告しようとするものである。この課題には既に有明海の事例を提示している(1)が、そこで形成された問題認識の延長線上に、当然の事ながら位置づけられるものである。

隠岐の民俗に関しては多くの調査・研究がなされており、たとえば柳田国男の指導の下に行なわれた全国規模の離島研究の中でも取り上げられている(2)。しかしながら、これも交通・交易伝承に限ってはごく断片的な記述しかなされていない。というより、直江氏が項目立てをしていること自体稀な例なのであって、管見の限りこの分野はほとんど等閑に付されているのである。ただ、山陰地方本土については、近年多田房明氏が伯耆Ⅱ天神川沿い・出雲Ⅱ神戸川沿いの事例を基に、注目すべき報告をしている(3)。石塚尊俊氏によれば、隠岐の民俗は出雲の一段古い形を残している(4)というのだから、神戸川沿いの伝承はおおいに参考とすべきものだろう。

これらの経緯を念頭に置きつつ、以下の記述に際してはまず自身が聞き得た伝承の成文化に力を注ぐこととしたい。基本資料の提示こそは全ての出発点だからであ



る。それを踏まえたうえで最後に若干の考察を行ない、前稿で浮き上った諸問題との関連を考え、このテーマの中へ組みこんでゆこうとするものである。

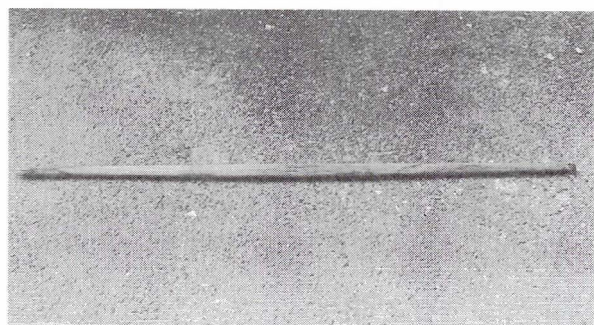
1 西郷から五箇村へ

西郷在住で、五箇村方面へ魚を行商に行った経験を有するのは田下益市氏（大正八年生）である。

田下氏は西郷の港町で生れたが、両親は島前の知夫里島の出身である。両親は田下氏の誕生以前に西郷へ来てあれこれ仕事をしていたが、最終的には魚の行商に落ち着いた。

父（仙吉）は、魚をカゴの中に入れ、テンビンボウでイナツテ（担って）行った。カゴはフチ（口径）が二尺ほどあり、底に十文字に紐を渡し、その紐を上で交差させてテンビンボウに架けるようにした。カゴには蓋をかぶせたが、本体同様竹製である。紐はシュロ縄だった。カゴは、港町の中野という竹細工屋で購入した。テンビンボウは現物が残されている（写真）が、長さ一四六・五センチ、幅は、最大四・五センチ、最小二・二センチ、重さ七〇グラムで、材料はシブシバである。しかし、田下氏の代になると、道路事情の整備に伴って自

転車が主力となり、テンビンボウは冬季の降雪時に限って使っただけとなった。それも第二次大戦前までであり、戦後はまったく使わなくなってしまった。田下氏がこの仕事を始めたのは十八才（昭和十一年）の時であるから、テンビンボウを使ったのは僅か五年ほどであった。



テンビンボウ

田下氏は島後の中はほとんど行商に行っており、行っていないのは布施だけだが、もっとも頻繁に売り歩いたのは五箇村である。これは父の代からのことで、五箇では「仙吉」の名を知らぬ者は居ないほどであった。

五箇方面へ行く時は、午前一時頃に出発した。村のどこまで行くかは、行ってみなければ解らな

い。その日の売れ具合によるからである。早く売り切れれば西郷寄りの小路で引き返すこともあり、売れなければ奥の北方方面まで行くこともあった。魚は、イカ・サバ・キス・カレイなどを持って行った。すべて生物であり、まったく塩はしていない。魚は前日に仕入れておく。漁師個人から買うこともあったが、組合から買うのが通例である。決済はカケになっており、客から集金してから払えば良かった。腐らないよう氷を入れたが、冬季は雪を入れた。雪は直接魚に当ててはいけないので、大根の葉などを魚の上にかぶせ、その上に雪をかけるようにした。テンビンの時は、カゴ一つに二貫、計四貫をイナウ。自転車になってからはトロバコに入れた。もともと多量に売れたのは正月用の魚で、トロバコで二〇から三〇箱にもなった。この時だけは自動車を頼むようにしたものである。もっぱらナガタニ氏に依頼していた。正月用の魚は、普段と違い予め注文を受けて用意をする。昔の正月には、特にブリとイカが欠かせないものであった。これも共に生物で、ブリは家ごとに一本買い求める習わしであった。

深夜に出かけるわけだが、出発前に「朝食」は済ませて行く。当然真暗だが、灯りをつけることはない。通い慣

れた道なので、必要が無かった。道筋は今とほぼ同じだが、五箇トンネルの付近は違っている。もっと上を歩いていた。道は近石付近から勾配がきつくなる。自転車の時は、ここから先はほとんど押して歩いた。真杉を過ぎ、都万目（つばめ）への道との分岐点に橋があるが、ここで焚き火をしながら夜明けを待つ。橋は、長さ三間ほどの木の橋である。毎日のことなので、予め一定の所に囲いを作り、火が焚けるようにしておいた。薪は前日の帰りがけに集めておく。明るくなってから峠路を登るわけだが、中山トンネルの手前付近に茶店があり、老人夫婦が営んでいた。ここで飲み食いしながら体を休める。そうしなければ体力が続かない。ここから五箇村となるわけだが、峠を下りた所が都万路（つまじ）である。この家々から炊事の煙が上るのを、上から確認してから売りに出かけた。

なお、藤田茂正氏（元五箇村誌編纂委員）からの御教示によれば、田下氏が歩いた西郷―五箇間の道は明治二七年の開通であるという。それ以前に五箇から行くには、小路から真谷（またに）と呼ばれる谷を上り、ヤケスギという所で峠を越えて都万目へ下り、皆市を通って原田から西郷へと出ていた。この道の時代は、牛や馬に

荷を付けて歩いてきた。運搬・農耕共に牛馬双方を使つたという。しかし、山道を大量輸送することは不可能なので、大正頃まで五箇―西郷間には船が通っていたようである。行商人も互いに行き来をしていた。

再び田下氏の話に戻るが、売る時はまず村の入口付近の家に二〜三軒入ってみる。アタリをつけるわけである。ここでの売れ具合により、行けると思えば村中の家に寄るし、駄目だとなればそこは飛ばして更に先の村へと行った。一つ不思議なのは、夏に村の入口で蛇を見かけると縁起が良い事であった。この時はまず間違ひなく売れた。昔は蛇も良く見たものである。売り方は魚によって異なる。数によるものと目方によるものがあり、イカやサバは前者、キスやカレイは後者である。ただし、量り売りをするものも切り身にするものは無く、必ず尾頭付きであった。行商は切り売りはしないのが通例なのである。計量にはキンリョウという竿秤を用いた。決済は、原則として現金で行なったが、時には米と換えることもあった。米で貰っても、それを売って金にしたことはない。そんな必要は無いほどの量だったということである。カケウリで、家ごとに手帳に記録しておく、益暮に集金した。益は、昭和十五年以前は旧暦七月に

やっていたが、十三日に集金する習わしであった。丁度満月となるので具合が良い。正月も、小学生の頃（昭和初期）までは旧暦だった。暮は二四、五日頃集金に行つた。顔馴染みでも踏み倒されることがあり、これをヒカカッタと言う。

五箇の者達からは「チブリ」と通称されていた。前述のとおり父が知夫里島の出身だったから、父の代からこう呼ばれていたのだろう。特に親しくしていたのは、苗代田の柳原（やなはら）氏である。行けば必ず立ち寄つた。この家は裕福で、しかも魚好きの老人が居たからである。昼食もほとんどこの家で御馳走になっていた。詰まるところ、魚は只で置いてくることになったのである。

足丈度は、積雪時でも地下足袋であった。父の時代は藁製雪沓だったが、これはワランジ（草鞋）の爪先を巻きつけたようなものであった。頭には防寒頭巾を被る。上下体は一般的な上着とズボンであった。

前述のとおり往路は夜道を行つたわけだが、暗いところを歩いて一番怖いのは女に出会うことだった。一人歩きで来るともあつたが、擦れ違いに挨拶をして、返事をするにはまず無いからである。更には、都

万目の人口付近で呪詛をしている者を時折見かけたが、これは白装束であったから余計に怖く感じたものである。動物で注意すべきは猫だった。人を騙すと言われているが、大久保という魚売りの翁と共に行った時にやられたことがある。防ぐには煙草に火をつけると良いと言われていた。

2 西郷から布施へ

布施で話を聞かせてくれたのは、坪康平氏（大正七年生）である。

ここの中心的な生業は林業であり、西郷のように漁業に力を入れているわけではない。昔は女が山仕事を行ない、男が船で木材を運び出しては売ってきた。実入りは結構良かったのである。田畑も少ないが、島内各地の木材搬出先に小作地を持っており、食料調達はもっぱらそこから行なっていた。

右のような事情から漁業専従者は少なく、地先から水揚げされる魚もほとんど決まり切っていた。人々は、むしろ西郷から来る行商の魚売りから魚を買い求めたのである。

魚売りはカゴフリと呼ばれていた。テンビンボウにカ

ゴを吊げて売りに来たものである。カゴフリは全て女性であった。名前を覚えているのは、ダイトウ・ハヤシ・ハマダハルエの三人である。ダイトウは第二次大戦前の人である。あとの二人は戦後の人だが、ハヤシは既に亡くなったと聞いている。

布施―西郷間の道は今なお整備の遅れた区間があるが、昔はさらに悪かった。往來はテキセンと通称された船によっていたのである。カゴフリもこれに乗って遣って来た。既に自転車もかなり普及していたが、船に乗るにはテンビンボウの方が都合が良く、戦後なおこれが行なわれたのである。カゴフリは年間を通じてほとんど毎日来ていたから、村の者とは顔馴染みになっていた。来ないのは船が欠航になった時だけである。西郷からの所要時間は一時間ほどで、カゴフリは午前十時半頃着く船で来ては売り歩き、午後二時から三時頃の船で帰って行った。やがてバスが通うようになったが、しばらく船も並行して運航されていた。人はバス、荷物は船という分担がなされたが、カゴフリは荷が嵩むので、有るうちは船を利用したものである。

前述のとおり地先の魚は決まりきっていたが、カゴフリは様々なものを持って来た。生物はサバ・メバル・ブ

リ・アジ・イワシ、塩物はカレイ・ハタハタ・小アジ等々である。この他に乾物も持って来た。その時によっては、回って来るのを待っていると欲しい魚が無くなることもあったので、船着場でカゴフリを待ち受けて目当てのものを買い求めることもあった。ちなみに、地元産が良かったのはサザエとアワビくらいである。決済は、その場で現金払いであった。

カゴフリは第二次大戦後もかなり長く来ていたが、やがて地元の方が行商を始めると来なくなった。西郷から布施へ嫁いできた山根末子がリヤカーに魚を積んで売り歩くようになったのである。一時的には、ハマダと山根が共にやっていた。山根の特徴は、決済をカケウリとしたことである。山根は鮮魚小売店が出来るまで続けていた。なお、行商の時代までは、魚は大小を問わず必ず魚頭つきのまま買ったものである。それを家で刺身にでも何にでも調理するのが通例だった。

3 中村・湊

湊は島の北端に位置しているが、行政上は西郷町に所属している。石田利則氏（明治四〇年生）から話を聞くことが出来た。

石田氏宅は、現在は酒屋を営んでいるが、かつては漁業で生活をしており、利則氏は漁協の組合長を勤めたこともある。魚は、大部分は島外へ売り捌いたが、一部は村内用にも充てられた。村の中を売り歩いたのはもっぱら主婦である。石田氏の母（しお）もこれに従事していた。しおは佐世保の出身だったが、この仕事が好きで八〇才近くまでやっていた。夫や息子が獲った魚を売るのが原則で、他人から仕入れるのは余程足りない時だけである。したがって、魚種は特に一定しておらず、獲れたものを売るといふ素朴な商いであった。しおが歩いたのは中村・湊の村内だけで、他所へ行ったことは無い。相手は不特定で、格別の得意は無かったようである。売り歩く時は、ソウキと言う竹籠に魚を入れ、これをテンピンに吊げて担った。ソウキは、かつて中村にこれを作る職人が居り、そこから買い求めた。今は作れる人も居なくなってしまうが、短距離なら手に提げて行くことも出来、便利なものであった。

西村からも魚売りが来ていた。名前を覚えているのはタマリヤ・オオマエ・マエカジャ・ヤマネ・マツバの五人だが、何れも女性である。もっとも頻繁に来たのはタマリヤで、タマリヤノバアサンと通称され、第二次大戦

前生れの人ならば知らない者は無いくらいである。それでも毎日来たわけではなく、水揚げがあれば来るという程度であった。夫が獲ったものを持って来たが、印象深いのはツツリという重量一貫目強ほどの魚である。ナギの時季（暖い時）に獲れるもので、尾を紐で縛ってテンビンに吊げて来た。村の中を一軒ずつ売り歩く。トクイサンが決まっており、主としてそこを回っていた。ツツリは生物で持って来る。買った者が好みに応じて塩をしたが、保存出来たのは一週間から十日ほどだった。

4 西村から中村・湊へ

湊へは西村からも魚売りが来ていたことは前述のとおりだが、西村出身の松井貞徳氏（大正七年生）からも話を聞くことが出来た。

この仕事をしていたのは全て女性であり、母親もやっていた。名前を覚えているのは、タマリヤ・オクナカ・オクダ・オオエ・マツバ（母）の五人である。半農半漁で生計を立てていたから、常に漁に出ていたわけではなく、魚売りも言わば片手間仕事であった。夫が獲って来たものを売るのが原則であったから、売りに出るのはたいてい夕方からになった。というのは、昔は手漕ぎ舟

であったから舟足が遅く、朝出漁しても早く戻ることが出来なかったからである。この舟はカンコウと呼ばれ、長さ二二尺、幅四尺五寸が標準であった。材料は杉で、村の舟大工が造り、一五年から二〇年は使えたものである。第二次大戦頃まではこれが主力だった。

母が売り歩いたのは、湊・下元屋を含む中村地区一帯である。主な立寄先は、宿屋など業務用に魚を使うところ、および比較的裕福な家である。当時、一般家庭で鮮魚を買って食べることはなかなか出来なかった。売り歩く時はテンビンの前後に吊り下げて担う。前述のソウキに魚を入れて下げる。テンピンは、元来浜から魚を上げるのに使っており、副次的に行商用にも用いたのである。担う時の履物は、浜上げの時はアシナカ、行商の時はゾウリであった。アシナカは漁の際も着用したが、滑らず泥跳ねもしない具合の良いものである。決済は現金で行ない、物々交換をしたことは無い。原則として即金であったが、時にはカケとすることもあった。この魚売りが特に儲かったという印象は無い。海産物で良い収入となったのはワカメである。なお、正月用の魚はブリで、地元産であったが、それを扱うことはしなかった。

結び——若干の考察——

以上、断片的なものではあるが、島後の魚売りの伝承について報告を試みた。文末に若干のコメントを附け加えて締めくくるとしたい。

最初は「売り手」から見てみよう。すぐに気がつくのは、男性は田下氏のみであり、他は全て女性である、ということである。とりわけ湊・西村の事例は「夫が獲ってきたものを妻が売り歩く」という、典型的なスタイルを確認しうるものであった。既に指摘した(5)とおろ、魚売りは女性という例は全国的に見ても数多い。島後も、まずは通説内に納まると見て良いだろう。逆説的には、唯一の男性である田下氏は目立つ存在だと言えるのである。その田下氏で指摘しておきたいのは、行動圏が広いということである。確かに頻繁に歩いたのは五箇村であるが、「行かなかったのは布施だけだということからも、それは歴然としている。広く歩いた理由は、田下氏が「專業者である」という事に求められるように思われる。布施で聞かれたカゴフリも專業に近いものであったかもしれないが、親子二代続けて家業としていたことが確認されたのは田下氏だけである。「專業」については従来一元的に考えられてきたようである(6)

が、「もっぱらその仕事を行なう」のは共通であるとしても、「一家を背負って」と「家計の一助に」とでは、その意味あい異なるのであり、厳密には区分されるべきものである。前者に当てはまるのは「家業」とされるような場合であり、勢い活動範囲も広いものとなったのだろう。にもかかわらず布施へ行かなかった理由は聞いていないが、一つには交通事情の悪さがあったのではなからうか。田下氏は自転車で行っていたわけだが、布施へは長い間船でしか行くことが出来ず、天秤棒で担うほか無かったからである。離島の場合、険しい山道を歩くよりも海上を船で行く、というのは一つの図式となっているが、この場合運搬法は前近代的な平坦部タイプが遅くまで残る可能性を有していると言えそうである。ちなみに、魚売りの呼称を聞き出したのは唯一布施の「カゴフリ」だけであったが、これは正に天秤棒で担って売り歩く姿が近い近年まで見られたことに由来していると断じて良いだろう。

次に、運搬法について今少し触れてみたい。もともと注目すべきは、田下氏父子が峠路を天秤棒で担って越えていたことである。益市氏はごく僅かな期間、それも積雪季に限って使っていたのであるが、それが却って問題

を複雑にしていると云える。つい先程「天秤棒は平坦部タイプ」と書いたのであるが、これはあくまで「通説」に準じた便宜的なものであり、こう決めてかかって良いかどうか自身は迷っているのが実情なのである(7)。

田下父子のケースを長距離と言えるかどうかという事もあるが、坂道を歩いてきた事実は動かない。ということとは、先に指摘した既製理論の枠内に納まらぬ事例が確認された事を意味するのである。たまたま「例外」が一致を見たのか、それとも通説とは異なる何かを示唆するものなのか、その解釈は不透明である。さらにここではより利便性の高い運搬法が普及した時点において、積雪という難条件下でのみ残存していた、という要素が加味されてくる。積雪季において原初的な運搬法が残されることは、ポッカの例で経験しているが(8)、それはあくまで元来坂道での運搬に適合したものととしての事である。天秤棒をそうせしめたものが何であるかは、なお検討の余地が有ると云えるだろう。

「得意」についても述べておかなければなるまい。まず言えるのは、その有無にかなりのバラツキが見られ、しかもその指標が先に指摘した「買手の絶対数の多少」(9)に必ずしも集約出来そうにない、という事であ

る。顕著な例が湊で、同じ買手でありながら、村内の者が行なう時は無いのに、西村から売りに来る者には有るのである。換言すれば、村内の者はどこへ行っても良く、外部の者は決められた所しか行ってはならぬ、という事なのだが、これは内に甘く外に厳しい日本の集団の特質が作用しているようにも見える。ムラ的な体質という点で先の指摘と共通することでもあり、得意設定の要素として新たに頭に置いてゆかなければならないだろう。ところで、迷わされるのは田下氏である。その売り方を見る限りではむしろ市場原理的であって、所謂得意は無いように思われる。「売り切れた所で終り」では、得意関係は成り立たない。五箇村で確認してみなければならぬわけではあるが、おそらく有力な競争相手が無かったために、そんな売り方が出来たのだろう。しかし、その田下氏にも必ず立ち寄りねばならぬ家があった。柳原氏宅である。問題となるのは、得意というものは、従来見てきたようにある程度纏まった集団として把握されるべきものなのか、それともこの例のように只一つしか無い場合も含めるのか、という事である。ここで直ちに答を出す事は出来ないが、詰まるところ、得意の設定により得られるものを、量的な尺度で測れるものと

するか、それとも質的な内容を重視するのか、という事の考察を更に積み重ねてみる必要があるように思われるのである。

註

- 1 拙稿「魚売りの伝承——有明海と泉水海区域の実態と経済構造からの位置づけ——」『民俗文化』第三号 平成三年三月
- 2 直江廣治氏「島根県隠岐郡五箇村久見」『離島生活の研究』 昭和五〇年七月再刊
- 3 「鮮魚の行商と農漁村文化の交流」『山陰民俗』第五四号 平成二年十月
- 4 『日本の民俗 島根』(昭和四八年四月) 二二頁
- 5 拙稿「販女の伝承——「両義的(性)交換」の提唱——」『交通史研究』第二七号(平成三年十一月) 四頁
- 6 『経済学辞典をいくつか調べてみたが、「専業」という項目立てをしているものは見出せなかった。「分業」の項で「仕事(職業)の専門化」という表現がなされているくらいである。ちなみにこれとの絡みで気になるのは、マックス・ウェーバーの言う職業と身分の結合である(『経済行為の社会学的基础範疇』『世界の名著』五〇 ウェーバー』四〇八頁)。というのも、前稿で柳田国男が販女

の身分について暗示をしている事を指摘しておいたからである(前掲『交通史研究』二七号三頁)。なお、ウェーバーの所論については、住谷一彦氏から御教示を頂いた。

- 7 拙稿「国境の交流——土佐と四万十川中流域と伊予——北宇和を結ぶ道——」『民俗文化』第四号(平成四年三月) 一一七〜一一八頁
 - 8 拙稿「村人の仕事」『細入村史』(昭和六二年三月) 七九八〜七九九頁
 - 9 前掲『交通史研究』二七号八頁
- 付記 隠岐の調査は、一九一一年度夏季ゼミ合宿として実施したものである。合宿に際しては、石塚尊俊・若林久・藤田茂正の諸先生をはじめ、西郷町役場、西郷・布施・中村の各漁業協同組合、文中に御芳名を掲げた方々をはじめとする島民の皆様から、格別の御高配を賜わった。銘記して学生達と共に心からお礼を申し上げる次第である。なお、参加学生は、白坂和代・松井ますみ・村上佳代・塩澤美帆・鈴木伸二の五名である。